

濱松までの道眞砂地にて松原なれば、ちひさき子供松露めせ〜といふを求めてこよひは濱松。

一、十七日。夜ふかく出づ。てんりうのこなた、藪ある内の里池田といふ。むかしは宿にや。わたしは東しらむほどなれば、心しづか也。見付の町のなかほどに梅の木あり。さはる所なればきるべきものなるに、いはれやあるとたづぬれば、此所の氏神天満神にてまします。此町を御輿を渡すに、むかしは此木の下におろし奉る。今はかたをかゆると云々。晝はかけ川にやすみ、行くてさやの中山、何となく心とまる。折しもかへ馬すとておりたちたれば、腰の刀さやばしりけるを、やをら帽にをさめて、

あぶなきは命なりけりおもはずもぬけし刀のさやの中山大井川水濁れて、何のつゝがもなく嶋田につく。

一、十八日。けふは折々曇ぬれど日いとよし。うつの山べのつたの細道をすぐるに、いとさまざまなる事どもおもひつゞけられて、修行者ならでも見しれる人もがなとおもひて、馬よりおりてこえゆけども、けふは下りのみにてのぼるものはまれ也。取分て古郷の事なつかしく物あはれ也。

十だんご今はくふ事もならずといふ。まり子に晝のやすみして、日高く江尻につく。末のとまりもあしく、二里三里ゆきたりとてもせんなければとまる。

一、十九日。有あけ隈なくのこり、三穂の松原それかあらぬかといふほどなるに、ちひさきあま舟こぎ出るかいの音、空にも關のとねがひけるも、思ひのまゝなるしのゝめに、月の隈なる村千鳥の友よびかはし、清見寺の鐘の聲、とりあつめたる事ども、たゞあたらのとばかり口ずさみて、古郷にて風月にほのすいたる人々の事、とりわきおもひ出たり。もと見しにはかはり、清見が關のあととはとほらず、ゆるかむばらすぎて 田子の浦に打出て見れば、ましろなる富士の高根は言語道斷也。あしたか山も峯には白雪つもれり。險阻なる嶽と見ゆ例の狂言。

愛鷹の山ややいとをすゑぬらんふじの煙の空になびくは富士川水あさく舟もしづかに、よしはらにつく。鳴澤は長み一里ばかりあり。うなぎつる舟うかべり。水鳥数もなくみち〜たり。三嶋にはくれか〜りてつきたれば、明神にも詣でず。

一、二十日。山道いぶせくてあけはてゝ宿りを出づ。よべの雪、峰にはすこしつもれり。のぼりくだるほどのくるしさはさら也。小田原には、しれる人などありてむづかしければ、酒匂まで通りたり。もとより爰は馬次にもあらねども、よき宿は二つばかりありときゝて、それを志してとは

せられたれば、けふはすゝはきとてはちぶきて門にもたゝせず。腹立て何とせんとおもひをるに馬子のいはく、これより又半里ばかりさきに、こふづといふ所あり、馬子が在所なり。やどもあるべしといふを力にて、かの所にゆきてあるにまかせて、宿一つ借りて荷などおろし入れたれば、只いまなる所、しかもたゝみもなく、しとみひとへなる所にて、ゆあびせんやうもなく、かはやもなしといふ。誰にむかひてはらたゝむやうもなけれど、むねつぶ〜となる心ちして、かしらもいたく日ははや暮れぬ。おもひめぐらせど、こゝにはやどりがたく、出むとすれど馬もなし。八十ばかりの翁が馬をかりて、夕やみのたど〜しきに、三里半がほど、からうじて子ひとつばかりに大磯につく。此家もあやしけれど、かのやどりにおもひ合すれば、玉の臺也。

一、二十一日。日ひとひくもりて、雪少しづ〜ちりて、身もひゆ。けふはことなる事もなくて、かな川につく。あすは江戸へ入らむまうけなどす。

右の紀行指して見るに足る事もなく、此録へ可加ほどの意趣はなけれども、浅井一政の子にて源右衛門政右の道の記なれば也。此人本藩にて名望ある事、衆の所識也。

偶作

一、鍋屋利兵衛時事を諷する詩
長安大道紫駟秋。昨日桃花渭水流。行客莫過西苑上。風飄楓葉使人愁。

一、新川郡今江村百姓御稱美
白銀十枚

新川郡今江村
戸簡七十七歳

五兵衛

五兵衛儀、往古能美郡の百姓共新川郡へ引越被仰付候に